



町民文芸

只見短歌会 令和七年二月詠草

唐突に電気おもちやの鳴り出しぬかつての主は学生になり
目黒 富子

関谷登美子

春分を迎へ寒波の予報あり昔なつかし豆拾ふ子等

立花 奏音

新雪をかき分け進む二歳児のはじける笑顔冬陽が照らす

新国由紀子

降雪の続けば日々に除雪機の音の飛び交ふ雪のアーチよ

渡部ヨリ子

しわしわの衣服を出してまた纏ひ断捨離出来ぬ日の続きみ

只見俳句会 二月定例会

積雪や何度見てもふえる嵩
一瞬の雪降る気配空仰ぎ
味代子

一 恵

一 恵

一字ごと寒飴せがむ火の用心
推しドラの余韻まといし除雪かな
真理子

真理子

堅雪に木のスケートで遊びけり
大つらら見上げながらの村湯かな
睦子

睦子

カフェオレを妻が差し出す冬の朝
うららかな睦月を過ぎす昼下がりに
礼

礼

静かさやとつぷりと言う雪の中
窓明かり背な毛糸の色あわせ

寒の飴供へ一年達者でと
見えぬ妻に新聞読んで春ごたつ
一 穂

一 穂

修 一

冬の重きに耐えて朝日指す
カレンダー二月を剥がし一区切り
信

信

イヌフグリ踏まれてもなお伸びにけり
廃屋や見る人もなし梅の花
都

都

ニン月やテレビニュースに戦さあり
立てかけたスコップの先寒波くる